

THE SPELL: AN EXTRAVAGANZA

について

—Charlotte Brontë の Juvenilia (4) —

和 知 誠 之 助

1. 自己内部の二面性の凝視

The Spell: An Extravaganza は Charlotte Brontë が Roe Head の Miss Wooler の学校から帰り、故郷の Haworth においてロマンの夢を織り綴っていた、まだ18才になったばかりの夏に書いたものであり、その草稿は現在大英博物館に *The Scrap Book* (1834—1835) と一緒に綴じて保存されている。¹⁾

この作は42,000語におよぶかなり長いもの²⁾で、「一つの狂想曲」という副題も暗示するように、形式・内容ともに手のこんだ奇抜な作品であるが、芸術作品としては決して秀れたものとはいえない。しかし Charlotte Brontë の成長をたどるうえで多くの問題を提供しており、とくに二つの点に注目される。その一つは主人公の性格であり、他は一人称の視点による叙述である。

この時期の Charlotte は、Scott や Byron などのロマン派作家に心酔し、

1) 1931年 George Edwin MacLean が読みにくい草稿を判読し、長い序(34頁)を付して Oxford University Press より発表したことはすでに述べた。(『甲南女子大学英文学研究』第6号, p. 12) 本稿の頁数はそれによる。また多くの小品からなる *The Scrap Book* は The Shakespeare Head Brontë に facsimile で収められているが、大英博物館から草稿のマイクロ・フィルムが入手できたので、本稿ではそれも利用することができた。

2) 上記のもので146頁。

彼らの強い影響の下にロマンチックな白昼夢, 'that bright darling dream'¹⁾ を見つけており, 新しく創造したアフリカの夢の世界 Angria を舞台にして華麗な愛憎の世界に遊んでいた。その Angrian Cycle の中心人物 Zamorna 侯の性格には, いわゆる Byronic hero に特有な悪魔的要素が濃厚になり, その人間像は複雑さを増していた。また Zamorna に対する悪の権化とも思える Percy を配し, 両者の抜きがたい確執が Angria の世界に人間世界の現実的複雑性を倍加して, 仮空のロマンの世界に人間のなまなましが描き出され始めていた。

人間性の複雑さが, この *The Spell* においては, 性格の相反する双生児という形で提示されている。Zamorna を愛する Mary Henrietta は, 物語の最後において Zamorna と外見はまったく瓜二つで見分けがつかないが性格の正反対な双生児の兄が存在することを知らされるまで, 夫の矛盾する言行にとまどい心痛を重ねるのであり, 読者も Zamorna と思える人物の奇怪な二重性格ともいえる存在に混乱させられる。

物語の終りにおいて双生児の存在を示すことによってサスペンスを解決するという構成はきわめて陳腐で安易であり, その意味において Charlotte の *The Spell* における試みは失敗であるといつてよい。しかし見逃してならないのは, 人間における二面性に対しての Charlotte の執拗なまでの対決である。Stevenson の *Dr. Jekyll and Mr. Hyde* のような明白なものをまつまでもなく, 複雑・多岐な変動を重ねる近代の社会において, 人間存在の複雑さは自意識の深化に伴ってますます解きがたい謎となって, 生きる問題と深刻にかかわり合っていく。個の内面を誠実に凝視すればするほど, 自らのうちの解きがたい謎は昏迷を深めて行く。Charlotte にあっても, 彼女がとくに関心をよせた Byron をはじめ²⁾ 彼女のすぐそばにいる弟の Branwell

1) "Retrospection" (1835) の中にある句。

2) Ratchford 女史は, この作における二重性格とも思える人物の取扱いは恐らく当時人々の耳目を驚かせていた Byron の生涯に暗示を受けたのであろうと述べて

や彼女自身においても、人間存在の不可思議さは慎重で長い考察を要求したのである。

一人称の視点による叙述もこの問題と関連せずに考えることはできない。Charlotteはその作品の大部分において一人称の視点で描いている。Juveniliaのほとんどの作も一人称で描かれているが、とくに注目すべき点は、それが作者自身の視点でもなく、また主人公の視点でもなく、作中の副次的人物に視点が置かれていることである。Juveniliaの初期のものでは中年の兵士 Captain Tree、つぎには主人公に敵意をもつ弟の Lord Charles Florian Wellesley、最後には主人公と同じく Wellesley 家の一員であるが、家の恥とされている Charles Townshend が物語の語り手になっていて、この *The Spell* においては Lord Charles が語り手である。

彼は物語の主人公 Zamorna の弟であり、双生児の場合と同じく、主人公のいわば分身である。このような Charles を語り手に設定することによって、Charlotte は自己の内部にひそむ二重性を兄と弟、あるいは双生児、または親戚に分化し、さらに分化された一方から他方を直視させることによって、自らの内部の複雑で矛盾する二面性に対決しようとしたのではなかろうか。もちろん Charlotte の自らの内部への凝視はこれだけにとどまるわけではない。しかし18才の夏をむかえ、それまでの幼年時代の空中楼阁的夢幻の世界から、いわば大人の世界の扉を叩きかけていた Charlotte のひたむきな自己対決が、これらの方法に現われているといっても誤まりはなかろう。

痛ましいまでの自己との対決である。しかしここにはまだ人生の戸口に立ったばかりの迷いがある。*Jane Eyre* においてもきびしい凝視が続く。しかしそこには現実の生の歩みにおいて自己と対決すると同時に、自らの周囲の現実に苦闘し、一人の女の生きる苦しみを体験し、あらたな認識に到達した

いる。(Cf. *The Brontës' Web of Childhood*, p. 85.) また、Charlotte Maurat はこの作が 'directly inspired by the complex, mysterious personality of Byron.' (*The Brontës' Secret*, p. 72.) と述べている。これらの説を否定することはできないが、それだけに帰するのは一面的な見解だと思われる。

ゆとりと、その反面の苦悩を伴った祈りがこめられている。たとえば、*Jane Eyre* は自叙伝的だといわれる。そのとおりに違いない。しかしその外面的類似性にあまりとらわれてはならない。作者の外的現実との大きな違いも作者が意識した大きな虚構である。*Jane* が作者とは異なって孤児であることもその一つのあらわれである。母の死後幼なくして一家の主婦がわりとなった長女としての責任感をひしひしと身を感じていた *Charlotte* が、現実を裏がえしにして孤児となった場合を仮定し、そこに女の生き方をひたむきに探ったのが *Jane Eyre* である。

ここで *Jane Eyre* 論をくり広げるつもりはない。ただ述べておきたいのは、そのように自己の生き方に致命的な対決を続ける *Charlotte* の姿勢が18才の少女の時にもすでに明白に読み取ることができるということであり、その一途なまでの姿勢が *Charlotte* の人間としての、また作家としての成長と無縁ではないということである。

2. *The Spell* の概略

物語は *Zamorna* と *Florence Marian Hume* (*Zamorna* の二番目の妻)¹⁾ との間に生まれた幼ない *Almeida* の死から始まる。その葬儀のとき私 (*Charles Wellesley*) は二人の見知らぬ人 (一人の婦人と一人の紳士) を見て好奇心をかきたてられる。第3および第4章は、*Zamorna* 侯の夫人である *Mary Henrietta* が祖母 *Lady Helen Percy* へあてた手紙の形をとっており、そこには夫を熱愛する *Mary* が夫 *Zamorna* の矛盾する言動やそれに伴う不可思議な事件の連続により心痛する様子を書き記されている。彼女は、*Mina Laury* が世話をしている *Ernest Fits Arthur* の父は *Zamorna* に違いないが母は誰だろうか、と好奇心にかられて彼らの住居 *Douro Villa* を訪れる。男の子と女の子を見かけるが、一人の婦人から、二人の子供は15

1) 二人の結婚は *The Bridal* (1832) で取扱われている。

才の時結婚して生まれたわが子だが、子供たちの父が Zamorna であるかどうかは時が示す、といわれて一時立腹する。帰宅した彼女は Zamorna の下僕で唾の小人である Finic から、しつとよるせんさくは Zamorna の死を招くとの意を手振りでも知らされたりしてますます苦しみ続ける。一方 Adrianopolis から帰った Zamorna はやつれ果てているが、Mary が好奇心にかられて Douro Villa を訪れたことをはげしく責める。

第5章は Zamorna の侍医 Dr. Alford の日記の形になっている。7月1日の日記によると、Zamorna 夫人から Zamorna 危篤のしらせを受けて邸に参上した医師は、狂気のように夫人を呪っている Zamorna の姿を見て驚くが、Zamorna が手当てを許さずピストルを手にして脅迫するのでやむなく邸を退去する。つぎの7月2日の朝、Zamorna が昨夜元気で演説したとの記事を新聞で読んだ医師が、信じられない思いで邸に出かけると、Zamorna は瀕死の重態で、病室には Wellington 公をはじめ10数名の人々が集まっている。Zamorna は一同に対して、後継者は Ernest だと答えるが、正式の子かとの問いに対しては、いつか判明すると答えるだけである。その時 Mina が飛び込んで来て、Zamorna が死ぬことはないと言っているのを聞いて、Zamorna は急に元気を恢復する。

それから5日経過して Zamorna はほとんど健康を恢復する。狂乱状態でいったことなど忘れて償いをしたいので直ぐ来て欲しいとの夫からの伝言を受けて喜んだ Mary はすぐ夫の室へ急ぐ。しかし意外なことが起こる。重病をしたとも思われぬ元気そうな Zamorna は冷たい表情で、夫人の Douro Villa 訪問を責め、夫人の手をきつく押すので、痛さに堪え切れない夫人が叫び声をあげると、Finic が飛び込んで来てあばれ出し、その間に Zamorna は笑いながら窓から姿を消す。不可解ななり行きに怒った夫人は、夫のしらせをもって来た侍従の Eugene を責めると、彼の方は、Zamorna が夫人の来ない理由を知りたがっていると告げ、さっき会ったばかりなのに、と不思議がっている夫人に、二階へ行けば違った気分のご主人に会えようと、二階へ行くように勧める。半信半疑の夫人は半時間ほどためらっているが、侍女から

さらに促されて出かけると、Zamorna の病氣あがりの姿に接し、愛情をこめた扱いを受ける。

Douro Villa を訪れた私 (Charles) は Zamorna から、美しい Emily Inez Wellesley を妻だと紹介される。5年間も妻をかくしていたことを非難する Charles に Zamorna は、今夜9時に Waterloo Palace に来るように伝える。最後の章では、多くの人々の集まったところに Wellington 公が Zamorna と Ernest Julius をつれて現われ、二人が双生児だと紹介し事情を説明する。それによると、丁度22年前の激しい嵐の夜、瓜二つの双生児が生まれたが、その時黒服の男が現われて spell (この物語の題名はこれによる) をとなえ、二人が一度に見られたり、12人以上の人に存在を知られたり、二人が交わったりすれば二人は死ぬことになると警告する。Ernest が姿をかくすよう命ぜられ、今日までその呪文が強力に働き、二人の生活は互いに交錯し、どちらがどちらの言動か分からないようにされていたと。名を隠した冒険者で18才の Ernest が放浪中に結婚した Emily が紹介され、Ernest が、これまでも一座の人々とは Zamorna として交わっていて親しいので、見知らぬ者として取扱わないでほしい、と頼むのに対して一同が同意して、この奇妙な物語が終る。

3. 一人称の視点

この物語は、すでに述べたように、主人公 Zamorna の弟 Charles が語り手になっているが、さらに Richardson の影響かもしれないが、Zamorna の夫人 Mary の手紙や医師の日記も挿入されていて、一人称の視点が守られている。一人称の視点は、一般的にいて、事件の直接の目撃者の記述であるがために迫真性を強める。この物語においても、手紙や日記の形は事件の関係者(また読者)を混乱させるような主人公の矛盾した不可解な言動の事実性を高め、またすでに終ったことを回想して記述するものとは違った現在性が強いので、その後の成り行きに対するサスペンス感を盛り上げるのに

役立っている。

Juvenilia において Charlotte Brontë は早くから一人称の視点から描いている。1829年の “Characters of the Great Men” は Captain Tree の視点を取っているが、1830年以降は、Captain Tree の作とされている “The Foundling” (June, 1833) を除いてほとんどすべて Charles (初めは Lord Charles Wellesley だが “Visits in Verreopolis,” Vol. II (Dec., 1830) からは Lord Charles Albert Florian Wellesley と呼称) の視点を取り, “Passing Events” (April, 1836) 以後は Charles Townshend が語り手とされている。

しかし一人称の視点が厳密に守られているわけではない。たとえば “The Green Dwarf” (1833) においては、Charles が Bud から聞いた話を物語る形になっているが、‘said Bud’ となったり、‘said I’ となったりして、同一人物たる Bud に三人称と一人称が混用されている。また ‘It is not my intention to give a full and detailed account of all that took place on this memorable day. . . .¹⁾ や ‘But I need not trouble the reader with more of the unhappy man’s misfortune.’²⁾ などの場合は作者としての Charles が ‘I’ となって注を加え、Charles が Bud から聞いた話を伝える形が守られている。また *Arthuriana* の中の “The Tragedy and the Essay” (Nov., 1833) では、Charles の兄 Arthur が、Edwin の劇および Lord Lofty の論文をからかうのを、Charles が語る形になっているが、大体はむしろ omniscient な視点に近い。*Corner Dishes* の中の “A Peep into a Picture Book” (May, 1834) では、Charles の視点が守られているが、この *The Spell* の第6章 (Mary が Zamorna の矛盾した言動に当惑し心痛する様子を描いた章) は、Zamornaの奇怪とも思える言動を Charles が直接目撃する可能性がうすく、視点があいまいになっている。

1) Ratchford (ed.), *Legends of Angria*, p. 23.

2) *Ibid.*, p. 28.

このように一人称の視点がすべて厳密に守られているわけではないが、作品を制作順に追うに従って Charlotte の取扱いが成熟して行くことは明らかに読み取ることができる。そして Charles Wellesley の次に Charles Townshend が語り手になる頃には作者が視点の意義を十分意識して用いているとって間違いない。1841年3月3日友人の Ellen Nussey にあてた手紙の一節は、人間を種々の視点から見ることの肝要性を Charlotte がじゅうぶん意識していたことを示している――

As to my employers, you will not expect me to say much respecting their characters when I tell you that I only arrived here yesterday. I have not the faculty of telling an individual's disposition at first sight. Before I can venture to pronounce on a character I must see it first under various lights and from various points of view.

Charlotte がここで、人間について何らかの判断を下す前に、種々の光の下で、種々の視点から見ることの必要性を説いていることは注目に価する。すなわち、視点によって人間は違った面を露呈するのであり、種々の視点からの観察を総合することによって初めて実体が把握できることを Charlotte は早く意識しており、それを実行したことは明白である。

しかしここで問題になるのは、Charlotte が種々の視点を取る必要性を強く意識していながら、何故一人称の視点を多く用いたかということと、Juvenilia の場合と公刊されている小説とを比べると、同じく一人称の視点を用いていながら、語り手の性格および物語における語り手の位置に大きな相異がある点である。

周知のように、Charlotte の公刊された小説は *Shirley* を除きすべて一人称の視点を取っている。*The Professor* の語り手 “I” すなわち Crimsworth, *Jane Eyre* の語り手 Jane, および *Villette* の語り手 Paul Emanuel は皆、男女の別はあるが、それぞれの物語において主人公の役を演じている。

これに反して *Juvenilia* における語り手は決して物語の主人公ではなく、むしろ副次的局外者的存在であり、物語る事件に直接関与することなく局外者として、むしろ主人公を批判する姿勢を取っている。これは決して偶然と考えることはできない。視点の重要性を意識していた *Charlotte* は、何らかの意図をもって一人称の視点を用い、しかもそれを質的に変化させて行ったに違いない。その意図を明らかにするためには、一人称の視点を取って観察し物語を進める語り手の性格が重要なポイントになる。

Juvenilia の大部分の物語の語り手である *Charles Wellesley* ははじめ *Arthur Wellesley* の魅力的な弟として登場する。“*Characters of the Great Men*” (Dec., 1829) においては *Charles* は次のように描かれている——

... all his motions are full of animation, and the expression of his face is so spirited, has so much vivacity in it, as to charm and cheer every beholder. His disposition is in exact keeping with his appearance—lively, gay, and elegant. His wit is sharp and piercing, but he often lets it play harmlessly round his opponent, then strikes him fiercely to the heart. His imagination is exceedingly vivid....

このように機知に富み想像力も豊かで快活で悪意のない魅力的な好青年として *Charles* は登場する。しかし兄 *Arthur* が悪魔的横暴さ、利己的な高慢さを付け加えて、いわゆる *Byronic hero* 的性格に変貌するに従って、*Charles* もその対照的人物として変化して行く。

“*Young Men’s Magazine*,” 2nd Series (Aug., 1830) では、すでに彼はいたずら好きの小妖精であり、甘やかされた自惚れの強いおせっかいな小僧として兄から邪魔物扱いされるようになる。彼は兄や友人のあら探しをするばかりの怠惰ないたずら者で、人の仲をさくの面白がるようになっているからである。*Verdopolis* や *Angria* の出来事を記録する *Charles* は兄の *Arthur* とは全く隔絶し、しかも物語の主人公として *Angria* の世界に厳と

して君臨する Arthur (Douro 侯) の言動に絶えず悪意にみちた好奇心を向けてせんさくし、敵意のこもった冷たい批判の言葉を浴びせるようになっていく。Ratchford 女史は、兄弟のこのような反目・隔絶について次のように述べている――

The increasing antagonism between the two reflects a growing conflict within Charlotte herself, as her conscience condemns while her romantic imagination rejoices in the moral lapses of her hero. To satisfy conscience she shapes Lord Charles into a yet more precise instrument of censure through which she roundly denounces the sins that made her hero glorious.¹⁾

Ratchford 女史は、Arthur と Charles との対立は作者としての Charlotte の心の中の争いの表現と見ているわけである。すなわち Charlotte は、Arthur においてロマンに想像をほしいままに駆けめぐらせることを楽しむ一方、そのような Arthur を Charles に批判させることによって自らの良心を表現しようとしたと説いている。良心という言葉が適切であるかどうかは別としても、Charlotte が Charles を通じて自らの心の自然な傾斜の表われである Arthur への批判を行なって自己自身への反省を加えていることは事実であろう。換言すれば、Charlotte が二人の対照的人物を対立させたことは、自らのもつ二元性を強く意識し二元的性格の内なる争いに必死になって対決したことを示している。Charlotte の自己内部における葛藤の激しさは彼女の一生を通じたものであり、これ以後年月を経るに従って様相を変えて行き、成熟するに従って現実には彼女にロマンへの傾斜を抑制させたり、あるいは抑制の糸を断とうとさせたりして、*The Professor* や *Jane Eyre* へと揺曳を重ね、やがて両者の渾然と融合した *Villette* へと展開して行く。しかしこの時期、すなわちまだ18才という少女期と成人期の丁度境目にある Charlotte が Charles を通じてロマンへの傾斜を批判しようとする姿勢は、

1) Ratchford, *Brontës' Web of Childhood*, p. 71.

かえって Arthur によって表現されているロマンの要素に彼女がいかに燃えるが如き憧憬と熱情を傾けていたかを、私たちにひしひしと痛ましく感じさせる。Ratchford 女史は Charles の Arthur 批判が Arthur をかえって 'glorious' にしたと述べているが、私たちは、Charlotte の内心の相剋の痛ましきの方に胸うたれるのである。

Arthuriana (1833) や *The Spell* までの語り手 Charles Wellesley はやがて Charles Townshend へと変容する。"Passing Events" (1836) において語り手 Charles Townshend は次のように述べている――

...I have no wife no family to bother me, no stake in commerce, no landed possessions no property in the funds to bother myself about... Not an atom of pride do I possess to check me, I'd soon be a shoeblack in a merry jovial servants' hall as heir-apparent to Wellingtonsland. I'm burdened neither by domestic ties, religious scruples nor political predilections... were each member of society a police spy, a law sleuth-dog upon the other, Charles Townshend would out-do them all in treachery, in double-dealing, in blood-thirsty hypocrisy...¹⁾

Charles Townshend は何らの系累もなく社界の外にある傍観者・局外者であり、Angria に叛乱が起きて Zamorna が敗北しても動揺することなく事態を静観できる人物である。彼はそれまでの語り手 Charles と同じく Wellesley 家に属しているが、Wellesley 家から自ら絶縁しているのである。²⁾ 彼は怠惰で何事にも熱意を示さず利己的で好奇心は強いが、決して他に悪意をもつわけではなく、ただ皮肉な言動をするだけである。要するに彼は Zamorna のような偉大で高貴な英雄的人物の正反対の冷たい人物であり、人間の愛情や憎悪をひややかに観察する局外者である。

1) *Miscellaneous Writings*, II (Shakespeare Head Brontë), p. 167.

2) この間の事情は明らかにされていない。

Charles Townshend の語り手になって後まもなく、Charlotte が長年にわたって ‘that darling bright dream’ を展開させ続けた Angria の世界に別れを告げるに至るのは決して偶然ではない。Charlotte は幼いロマンの夢をかけめぐらせた想像の世界を冷静に観察できるように成長したのであり、熱っぽい魔法の王国 Angria に訣別して、冷厳な現実の世界を直視し、リアルな人間の実体の探究を迫られて来るのであり、Charlotte は少女期を脱して文字通り成人の世界の生の現実¹に直面して行くのである。

Juvenilia の夢幻の境からの脱出を試みた最初の作 *The Professor* が、Juvenilia と同じく一人称の語り手を設定していても、そこに大きな相異が見られるのはそのためである。*The Professor* の世界は、Juvenilia のような王侯や貴婦人たちの激しい戦闘や熱烈な恋愛のくり広げられる異常な世界ではなく、まったくありふれた日常の男女の世界であり、また語り手は舞台の外にあって事件の成り行きにわずらわされることなく批判を下す傍観者ではなく、自ら舞台の中央に姿を現わす主役である。

この変化が Charlotte にとって進歩であるかどうかは別にして、少なくともそれは決して彼女の心の冷却を意味するものでないことは確かである。彼女にとって、それは生きる上で彼女が自らに課した苦しいつとめであったのであり、冷酷な現実生活の中で、丁度もっとも嫌悪した家庭教師の職をわが心情を殺して勤めたように、大きな苦悩の中であるべきあり方として、いわば ‘duty’ として自己に課したのである。そこに妹の Emily には見られない彼女の悲痛な自己対決の姿があることを見落してはならない。こうした苦しい過程を経て Charlotte の人間的、したがって芸術的成熟が徐々に行なわれて行ったのである。

The Professor は出版者に受け入れられず、公表は結局彼女の死後になったが、この作の不評を苦にした Charlotte が次に書いた *Jane Eyre* では、*The Professor* のような地味で平凡な世界とは異った激情の世界が描き出されることになる。激情の世界という点では Juvenilia と多くの共通点をもつが、少女時代のような a-moral なものではなく、むしろ清教徒的要素が強

い点では大きな相異が見られる。また語り手も事件の局外者であるどころか、舞台のまん真中に動く中心人物である点も *Juvenilia* と異っている。これらの相異が *Jane Eyre* の価値を高めていることは明らかである。

ここで注意したいことは、このように Charlotte の視点の設定の仕方に変化があったということ、またその変化が彼女の入間的成長・人間観察の深化に直接つながっていたことである。*The Spell* はそれ自体の作品価値が低いことは繰り返すまでもないが、上述の意味において Charlotte の成長の過程における一つの段階を示し、以後の展開をたどるうえで重要な意味をもっているといえよう。視点の問題は Charlotte にとっては決して単なる技巧の問題ではなく、彼女のうちに絶えず争い続けた二元性の争いの執拗さと、それとの対決の真剣さと痛ましさを直接に表現するものであり、彼女の生き方の根本につながる重要な問題であったことは疑いない。

4. 二元的性格

Charlotte Brontë の自らのうちなる二元性との対決は、視点への関心のみでなく、作中人物の性格描写にも如実に示されている。*Angria* 物語を通じての主要人物である *Zamorna* 侯は、その名称をいく度も変更されるが、性格もさまざまに変容されて行く。

最初は外形・内面ともにすぐれ、少女の目からする理想的男性として現われる。Arthur, Marquis of Douro は “Characters of the Great Men” (1829) においては、すでに引用したように¹⁾ 優雅で教養ある最高級の心の持主で、容姿も衆にすぐれて魅力的であり、才能は ‘lofty and soaring’ で、どちらかといえば ‘pensive thoughts and ideas’ に思いをめぐらせる。翌年の “Albion and Marina” (1830) では彼は Marquis of Tagus の名で登場するが、その容姿は次のようにたたえられている――

1) “Charlotte Brontë の *Juvenilia*(1)” (『甲南女子大学英文学研究』第6号, p.26.)

... his stature was lofty; his form equal in the magnificence of its proportions to that of Apollo Belvedere. The bright wealth and curls of his rich brown hair waved over a forehead of the purest marble in the placidity of its unveined whiteness. His nose and mouth were cast in the most perfect mould. But saw I never anything to equal his eye! ... what clearness, depth and lucid transparency in those large orbs of radiant brown! And the fascination of his smile was irresistible, though seldom did that sunshine of the mind break through the thoughtful and almost melancholy expression of his noble features....¹⁾

丈高く均整のとれた姿体，大理石のように白い額にふさふさと垂れる豊かな髪，まったく形よい鼻と口，さらにたとえようなく澄み深みをこめた大きな両眼——このような高貴な姿体の中に思いに沈み愁いをひめた表情が彼の特徴であり，ここには幼い Charlotte の想い描く理想の男性像が見られる。しかしその性格について次のように付け加えられている点は注意すべきである——

... The only blot I was ever able to discover in his character was that of a slight fierceness or impetuosity of temper which sometimes carried him beyond bounds, though at the slightest look or word of command from his father he instantly bridled his passion and became perfectly calm.²⁾

すなわち彼が時折激情にかられることである。ただこの激しさはまだ父の一寸した指導で抑制されるが，後の物語に進むにつれて激烈さを増し，高貴な権力者に特有な傲慢さから，やがては抑圧しがたい狂気なまでの激情となって爆発するようになる。

“The Bridal” (1832) においては，‘a youth of lofty stature and

1) *Miscellaneous Writings*, I, p.26.

2) *Ibid.*

remarkably graceful demeanour' とされ、素晴しく均整のとれた容姿が賛嘆されるとともに、'the radiant fire of genius and intellect'¹⁾ が大きな輝く瞳に見られるのは以前の物語と同様である。しかし "The Foundling" (1833) において Edward Sydney の名称を与えられた彼は、幼時の特徴である優雅さはまだ保持しているが、王家の出を示す特性を現わし始めていた——

There was in his character a decision which, according as it was properly or injudiciously managed, might form the foundation of a noble character or degenerate into one of dogged commonplace obstinacy. Generally mild and affable to those about him, he could sometimes, when opposed, assume a glance and tone of proud unbending haughtiness that spoke of noble blood.²⁾

ここで高貴な性格の基礎になるか、あるいは慎重にされないとどうしようもないただの頑固さに惰してしまうような強い性格が示されている。そしてこの後者の要素が次第に Arthur の性格に濃くなって行くのである。

The Spell と同年に書かれた *The Scrap Book* になると、Arthur (いまは Zamorna) の悪の面が強調され、容貌も怪奇に思われ、奇怪な言行やあくなきどん欲さなどが指摘される。たとえば "A Brace of Characters" では彼は 'youthful, profligate, splendid, dark-souled, vicious, magnificent'³⁾ と両極端の形容詞を冠せられたり、次のように奇怪な表情を気味悪がられる——

Let any one look long at the upper part of Zamorna's face and they will shudder. I have heard Queen Mary say in a fearful and suppressed tone, after she had been watching him unknown to himself for an hour or more. "Sire, what is that strange shade

1) *Ibid.*, pp. 205-206.

2) *Ibid.*, pp. 224-225.

3) *Miscellaneous Writings*, II, p. 51.

which seems to grow over your forehead? Sometimes, it does not pass away when you smile, but always more darkly and rapidly when you suddenly knit your brows to a frown.”¹⁾

同じく “A Late Occurrence” においても彼の黒い性格が強調される——

His conduct throughout the whole transaction has been disgraceful, unprincipled and unwarrantable in the highest degree. People in general can but imperfectly appreciate the secret and concealed workings of that young man's character. And as for the mighty basis of selfishness on which it is founded, few indeed have either skill or opportunity to fathom its depth or mete its circumference. Monopolizing to an extent seldom equaled, he would fain permit nothing either in heaven or on earth to escape his all-cratching grasp.²⁾

“Angria, My Angria”(1834)においてはまた, ‘That tinge of insanity which curiously mingles with his blood’ と記されているように, 狂気が Zamorna の複雑な性格として導入されて来る。これは *The Spell* に描かれる Zamorna の性格と相似たものである。

The Spell の語り手 Charles は兄である Zamorna 侯に Wellesley House から追い出されたために復讐として ‘his double-dealing, hypocritical, close, dark, secret, half-insane character’ を明らかにしたいと ‘Preface’ に述べて, Zamorna の奇怪な言動を記して行く。そして次のように非難を加える——

Serfs of Angria! Freemen of Verdopolis! I tell you that your tyrant and your idol is mad. Yes! there are black veins of utter perversion of intellect born with him and running through his whole soul; he acts at times under the control of impulses that

1) *Ibid.*, p. 52.

2) *Ibid.*, p. 82.

he cannot resist ; displays all the strange variableness and versality which characterize possessed lunatics ; runs head-forwards in dark by-paths sharply angular from the straight road of common sense and custom, and is in short an ungovernable fiery fool... Is the Duke of Zamorna sane or insane ?

Zamornaの容姿は以前と同じく‘that stately form’(p. 10)や‘his stately figure’(p. 29)あるいは‘the brow of youth and beauty’(p. 10)などがあるように、高貴な堂々たる美を保持しているが、性格は、“A Late Occurrence”で‘The sunshine of an April day’にたとえられているように、変りやすく気まぐれで、大変やさしい時があるかと思えば急変して理解に苦しむほど冷たくなり、Mary夫人は‘certain inconsistencies in the Duke’s conduct’に当惑するばかりである。またその性格については、‘the whole infernal disposition’(p. 9), ‘fiery defiance’(p. 15), ‘bitter melancholy’(p. 18)などの語が用いられ、また‘The Duke looked like a giant, a handsome one, but still a true indisputable Lucifer in the flesh. Something exceedingly sly, dark, secret, and imperturbable lurked in the glance of his eye, the curl of his lip, and the whole cast of his grand countenance.’(p. 116)とあるように容姿にも悪魔的黒さが指摘される。そして夫が‘double existence’をもっていると思い始め、‘Since our marriage it has been my constant study, the business of my life, to watch the unfolding of his strange character, to read his heart if I could,...’(p. 38)といわざるを得ないほどに当惑したMaryはZamornaの年少の頃からの変化に驚く――

How he has altered since twenty ! There was no grandeur in his form till that time, no martial majesty in his features. He looked elegant and effeminate and contemplative, and more like an extremely tall and beautiful girl than a bold, blustering man. Yes, hear it, ye ladies of Africa, the Duke of Zamorna was once

like a girl! How that assertion seems incredible now when we look at the fiery, haughty, imperious face of the young satrap of Angria with its quenchless, transfixing glances and rapid change of expression in which every turn only displays pride, effrontery, impetuosity in new and continually varied lights. He once never showed those vices except when he was angered. And truly Lord Douro, at the age of twelve, caught up in a whirlwind of passion, bore an appalling resemblance to the Duke of Zamorna at the age of twenty-two. In the same tantrums, how the violet veins in his white brow and whiter neck swelled and throbbed; how the clustering brown curls were tossed from their resting places on forehead and temple, like the forelock of a prancing stallion; his slight pliant form would strain and writhe while he struggled with his opponent (commonly Quashia) as though the spirit strove in mortal agony to accomplish that by force of desire which its clay casket was unequal to from fragility. (pp. 102—103.)

Zamorna の奇怪な矛盾した言動に翻弄される Mary の苦悩を明らかにした語り手は、物語の最後において Zamorna と外形は瓜二つであるが性格の正反対の双生児を登場させることによって紛糾した事態の謎に答えを出すわけであるが、物語のあとに付け加えられた N. B. の中に次の一節を記している——

If the young King of Angria has no *alter-ego* he ought to have such a convenient representative, for no single man, having one corporeal and one spiritual nature if these were rightly compounded without any mixture of pestilential ingredients, should, in right reason and in the ordinance of common sense and decency, speak and act in that capricious, double-dealing, unfathomable, incomprehensible, torturing, sphinx-like manner which he constantly assumes for reasons known only to himself. (p. 144.)

一人の人間としてあのように奇怪な気まぐれな不可解な言動をとり得る筈がないが故に「便利な代理」がなければその言動の説明がつかないと述べているのは、便利な代理によって物語を解決しようとしたことへの作者の弁解であろうが、Charlotte は決してそれによってこの複雑な問題が解決できるなどと安易に思っていた筈はないのであって、このような便法をも構ぜざるを得ないところに追いやられた彼女の悲痛な苦悶が裏がえしに表現されていると見た方が適切であろう。

それは Zamorna の性格における悪魔的側面が他の作中人物、とくに Percy の中に追求されて行くことにも現われている。Percy は残酷で復讐心強く人嫌いで専横であるが、それはまたこの頃の Zamorna の性格でもあり、両者は奇妙に類似し、まざり合って行く。Percy が悪魔的であるのみでなく、‘He still within his bosom held some human sympathies.’ と “Captain Flower’s Last”¹⁾ に歌われているように、暖かい人間性をもつ点も描き出されている点でも、彼と Zamorna は奇妙に交錯するのである。

Charlotte は人間性の探究を進めて行くうちに、いわゆる善玉・悪玉のような単純な存在は決してある筈はなく、人間性はきわめて複雑な混合物であるとの認識を深めて行った。しかし Juvenilia における段階では、Zamorna の Byronic hero 的性格を追うあまり、最後にはその悪魔的要素のみが影を大きくすることになり、Charlotte は Angria の世界に訣別せざるを得なくなる。彼女にとって Zamorna が矛盾した複雑な性格をもち不可思議な言動をする人物である限り魅力ある関心の対象であったが、一面的な人物になるにおよんで興味を失うことが最大の原因であろう。しかし Charlotte は現実にはじかにぶつかり視点を変更することなどによって、また複雑な人間性との対決を進めて行き、次第に moral と amoral、夢と現実とを融合して行く。*The Spell* はそれらの融合にいたる以前、まだ Charlotte 自らの内部における二元性が、丁度双生児として嵐の夜に生まれたばかりの Zamorna と Julius が取り組みあって争うように、格闘を続けていた時代の一つの苦しい

1) *Miscellaneous Writings*, I, pp. 309-311.

試みであったのであり、性急なわざとらしさがあることは否定できないが、Zamorna を通してのこの二重性格との対決は、Charlotte の人間的成長をたどるうえで多くの示唆を与えているわけである。

A Select Bibliography

A. Primary Sources

1. *The Spell: an Extravaganza*. Edited with Introduction by George Edwin MacLean. Oxford University Press, 1931.
2. *Legends of Angria*. Compiled by Fannie E. Ratchford and William Clyde DeVane. Yale University Press, 1933.
3. *The Twelve Adventures and Other Stories*. Compiled by Clement Shorter. Hodder and Stoughton, 1925.
4. *The Miscellaneous and Unpublished Writings of Charlotte and Patrick Branwell Brontë*. Shakespeare Head Brontë, 2 vols. 1936.
5. *Poems by Charlotte and Branwell Brontë*. Shakespeare Head Brontë, 1934.

B. Secondary Sources

1. Gérin, Winifred, *Charlotte Brontë: The Evolution of Genius*. Oxford, 1967.
2. Hinkley, Laura L., *The Brontës: Charlotte and Emily*. New York, Hastings House, 1945.
3. Knies, Earl A., *The Art of Charlotte Brontë*. Ohio University Press, 1969.
4. Kroeber, Karl, *Styles in Fictional Structure*. Princeton University Press, 1971.
5. Quertermous, Harry, *The Byronic Hero in the Writings of the Brontës*. The University of Texas: Unpublished dissertation, 1960.
6. Lambert, Diane, *The Shaping Spirit: A Study of the Novels of Emily and Charlotte Brontë*. Stanford University: Unpublished dissertation, 1967.
7. Maurat, Charlotte, *The Brontës' Secret*. Translated from the French by Margaret Meldrum. Constable, 1969.
8. Ratchford, Fannie E., *The Brontës' Web of Childhood*. Columbia University Press, 1941.
9. Shapiro, Arnold, *A Study of the Development of Art and Ideas in Charlotte Brontë's Fiction*. Indiana University: Unpublished dissertation, 1965.